

三重県尾鷲市の辺りから紀伊半島南端の串本を廻って和歌山県田辺市辺りまでが、本書で用いられる「熊野」がさし示す範囲だ。都から陸路を辿って貴族たちが参詣したという歴史や、先日の台風12号による豪雨被害のニュースを見ても、熊野は山深く閉ざされた世界というイメージが強い。しかし、そうした理解が一面的なものだけということ、本書は教えてくれる。

古代から現代までの熊野を海からの視点で多角的に論じた本書は、郷土史家や研究者が多彩な文章を寄せていて飽きさせない。日本書紀がイザナミの葬地とする「熊野の有馬村」に比定される花の窟のハナは、海に突き出た端であり、漁師たちのランドマークだった。秦の始皇帝に命じられて蓬莱山をめざした徐福伝説や神武東征伝説が語られ、中世には補陀落渡海の地でもあった熊野は、まさに海からの来訪者を迎える場所、船に乗って異界に向かう場所であった。

中世には熊野水軍が活躍し、近世になるとカツオ漁を中心として他国への出漁が行われ、三陸地方にまで漁法は伝承される。熊野を発祥とする網掛突取捕鯨法は、土佐の漁師がもつ技術との融合によって生まれ、それが遠く五島列島

深く開かれた世界



◇ 谷川健一・三石学 民俗学
熊野市職員
1921年生まれ、55年生まれ

の漁師にも伝えられた。また、移動するコンビニエンスストアの役割を果たしたという赤須賀船は、伊勢湾の奥の、熱田と桑名とを結ぶ渡船を生業とした漁民が、鉄道布設によって仕事を奪われたために南下したのだという。それもまた紀勢本線の開通によって消滅する。

明治3年、明治政府によって流罪となった隠れキリシタン300人弱が、長崎から熊野へと送られたという宗教弾圧事件、オスマントルコの軍艦エルトゥール号の遭難と救助、戦後生まれ初の芥川賞作家・中上健次と熊野など話題には事欠かない。敗戦前年に発生し大きな犠牲を出した東南海沖地震と津波についても、聞き取り調査などを踏まえて詳細な検証がなされている。熊野を知りたければ、まず本書だ。

海の熊野

谷川健一・三石学編

森話社 3500円